

私は文化人類学の立場から、主に日本におけるDV被害女性や、「家に帰れない／帰りたくない」少女たちの現実に向き合ってきた。DV被害者支援や女性保護の調査を通じて、暴力、家父長制、親密性といった概念を再考し、女性の生とその周縁化の構造について考察してきた。振り返ると、彼女たちには「家族から排除されている」という共通点があった。

文化人類学は、特定の集団や地域、コミュニティに参加し、日常の出来事を観察しながら、個別具体的な事例を通じて構造的問題を捉

女性と暴力の人類学

するイメージが強かったが、現在では都市や自社会を対象とする研究も多い。本コラムでは、人類学的アプローチで捉えた暴力の多層性と、都市における若年女性の居場所の問題を紹介する。

ある日、研究仲間から「最も印象に残ったシエルターでの経験は何か」と尋ねられた。即座に思い出したのは、幼い姉妹とのお絵かきのエピソードである。母親が弁護士事務所に行っている間、私は姉妹の託児を担当していた。和やかに絵を描いていると、姉が私の描いた妹の似顔絵に「顔に傷があるよ」と鉛筆で線を引き足した。一瞬、私は固まった。顔の傷といつても、よく見ないとわからない程度で、姉も単に絵とし

の中には、近年閉所に追い込まれる施設も出ている。一方で、全国のDVセンターに寄せられる相談件数は増加し続け、2022年以降は年間約12万件の高水準で推移している。では、女性たちはどこにいるのか？私は路上や公園に目を向け始めた。

「家」の 不在を生きる



名城大学経営学部教授
桑島 薫

える学問である。その根幹にはフィールドワークという手法がある。かつては「未開社会」を研究対象と

くわじま・かおる 文化人類学、ジェンダー論。東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程修了。博士（学術）

て足りない部分を補っただけかもしれない。真相はわからない。後に母親の記録を見ると、姉妹は祖父から暴力を受けていたとあった。暴力と言語化できない年齢の姉が描いた細い線は、目に見える傷とは異なる次元で暴力の痕跡を訴えてくるものだった。私はそれを、現象学的手法によって捉えようと試みた。

DVシエルター、保護施設、公園という三つのフィールドに共通するのは、近代家族像に照らして「逸脱」とされる女性たちの存在である。だがそれは、家族が居場所となり得ない現実を示してもいる。

社会の周縁に追いやられた女性たちの経験を丁寧にするにつれ、人類学の視点から、「家族」と「居場所」の意味を改めて問い直していき

こうした民間シエルター

